

片目の生砂神　　＝ ＝ ＝　　三州横山話より

村の生砂神は、早川孫三郎の地の神であったという理由で、その人の思うがままに、現在ある地へ、当時の芝刈山へ移されたと言いますが、今日ではもはや立派な境内になって、昔ながらの鎮守の森らしく見えます。

この神片眼なるため、村に片眼のものが多いとも、また田螺を厭い給う故、村内に田螺が育たぬとも言いますが、神名は白鳥六社大名神と言って、旧暦八月十四、五の両日が例祭に当たって、その日は拝殿の下にある舞台上、村の者が芝居を演ったもので、これを地狂言と言って、明治三〇年頃まで行いました。このほかは境内へ釜を築いて、甘酒を振舞うくらいのものでした。昔は男女の生殖器を模造した飾物などしたと言うことで、私の記憶にある頃にも、桐の木や、南瓜でこしらえて飾っておいて、駐在の巡査が巡回して来たのに驚いて引っ込めたことなどがありました。

白鳥神社

現在の白鳥神社は、山口忠利さんの裏の小高い丘の上にあります。鳥居は昭和になってから建てられたようですが、鳥居の前の石燈籠には「白鳥六社大明神」の文字と共に「元文五年」(1740年)と刻まれています。この時ここに立てられたのか、その後移設されたものかは判りませんが、これは今から265年前の8代将軍吉宗の時代のものです。

一時途絶えていた地狂言も20年ほど前に復活し、秋祭りの(10月第一日曜)神事後、奉納余興として演じられています。

